

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

曾根田遺跡は、福井県三方上中郡若狭町上黒田に所在する。若狭町は、平成17年（2005）3月31日に三方郡三方町と遠敷郡上中町が合併して誕生した町である。二つの町には黒田と称する地名が各々存在したため、合併時に曾根田遺跡が所在する旧上中町の黒田は、「上黒田」と改称した。曾根田遺跡は、鳥羽川の支流である黒田川によって開析された狭隘な谷の開口部を中心に展開する。曾根田遺跡の南側山麓部には古墳時代後期の下山古墳群が、また谷奥には中世の黒田寺跡が所在する（第1図）。

平成元年（1989）に基本計画が決定された舞鶴若狭自動車道は、舞鶴東インターチェンジから北陸自動車道敦賀インターチェンジまでを結ぶ自動車専用道路として計画された。計画された路線は、若狭湾国立公園を避ける形で山間部を貫くように設計された。この舞鶴若狭自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成9年（1997）以降嶺南地方西部より順次着手され始めた。これに伴って、事業予定地内の埋蔵文化財の試掘・発掘調査も順次実施された。

若狭町の西部にあたる旧上中町内での路線計画は、市街地を避けるように小浜市の東部から北側の山間部を貫いて、旧三方町域に連なる計画であった。そして、上黒田集落前面の谷内に上中インターチェンジが建設される計画であった。この谷内には、西より黒田寺跡・馬塚遺跡・下山古墳群・曾根田遺跡の4遺跡が周知の遺跡として存在していた。このため、各遺跡の内容と範囲の確認が必要となり、中日本高速道路株式会社からの依頼を受けた福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによって試掘調査が順次実施された。

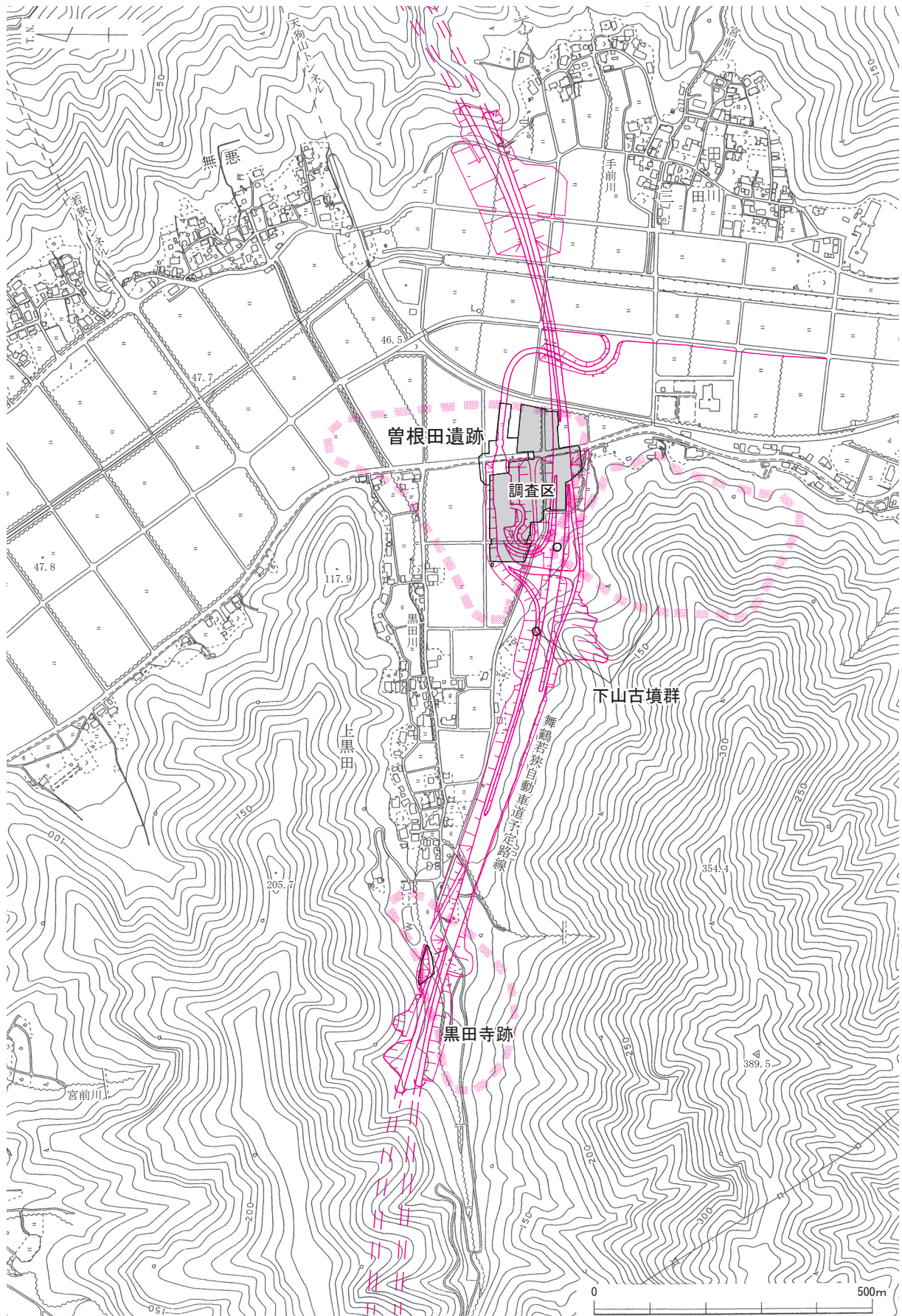
過去に行った分布調査では、曾根田遺跡は上黒田の谷の開口部北側を中心に広がっていることを確認していた。この分布調査で確認した範囲は、舞鶴若狭自動車の事業予定地にはおよんでいなかった。しかし、平成19年（2007）2月5・6日に実施した地方道路交付金事業に伴う県道改良工事の試掘調査により、曾根田遺跡の範囲が大きく広がることが明らかとなり、舞鶴若狭自動車道の事業予定地にまで範囲が拡大する可能性がでてきた。このため、舞鶴若狭自動車道の事業予定地についても試掘調査を実施し、遺跡の範囲と内容の確認が必要となった。

曾根田遺跡の試掘調査は、他の遺跡とともに平成19年（2007）3月8日～16日にかけて谷内の水田域を中心に実施した。

試掘調査の結果、試掘対象地が以前の圃場整備により著しく改変を受けていたものの、広範囲にわたって弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出された。これにより、遺跡が上黒田の谷内に広く遺存していることが明らかとなった。この結果を受けて、中日本高速道路株式会社と協議を行い、平成19年（2007）11月より調査に着手することで合意した。曾根田遺跡の調査は、平成19年（2007）11月1日より着手した。

なお、調査の進捗に伴って、試掘調査において遺構・遺物が確認できなかったために調査対象から外していた西側の農道および北側の農道脇にも、改めて遺構が展開することが明らかとなった。この部分の扱いについて再度関係機関と協議を行い、平成20年度に調査を行うことで合意した。

加えて、調査区内を南北にはしる町道部分についても一旦撤去した上で盛土造成を行うことが計画され、平成20年（2008）9月9日に町道部分の試掘調査を急遽追加して実施した。試掘調査により町道下



第1図 曾根田遺跡調査区位置図 (縮尺 1/10,000)

においても遺物の出土が認められ、発掘調査が必要と判断された。町道部分については主要な生活道路であることから、仮設道に振り替えた後に調査を実施することで合意した。このため、町道部分の調査は、平成21年度に実施することとなった。

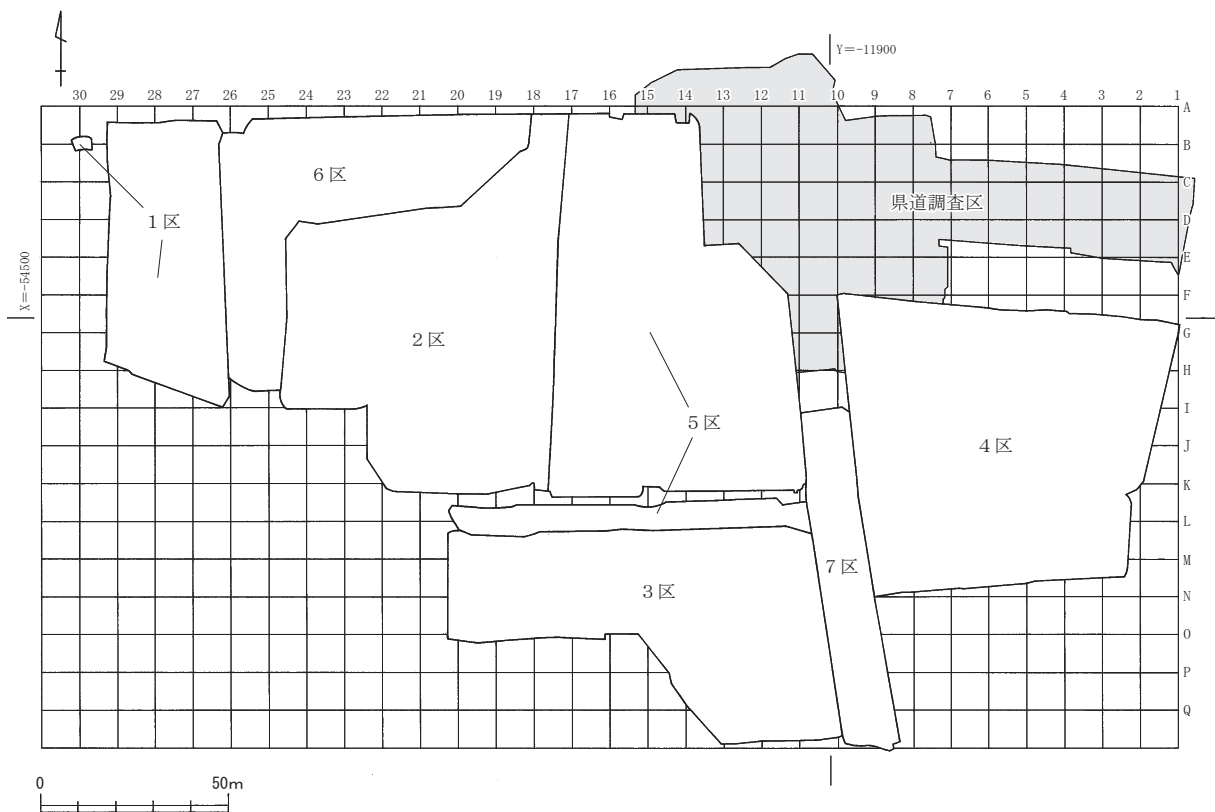
なお、調査範囲が広範囲にわたるため、調査区を1～7区に区分して調査を行った（第2図）。一部の調査区において調査期間が重複するが、平成19年度は1・2区の6,500㎡を、平成20年度は3～6区と1区追加調査区の19,500㎡を、平成21年度は7区の1,190㎡を調査した。発掘調査面積は、合計で27,190㎡をはかる。

第2節 調査の経過

曾根田遺跡の調査対象地が広域であるため、前述のように1～7区に区分し、順次調査を実施した。調査に際して、調査区内に10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは国土平面直角座標第IV系に揃えるように配置し、東西に1～30列、南北にA～Q列を配した（第2図）。そしてグリッドの北東角にそのグリッドの標識となる木杭を設定した。尚、グリッドについては、以下「A1」というように表記していく。

調査区は西から東に向かって緩やかに下る水田地帯であった。前節で述べたように、調査区内は圃場整備により階段状に地形が改変されており、改変に伴う削平は地山層にまで達していた。

調査は平成19年（2007）11月1日より開始した。重機を用いて表土の掘削作業を行い、14日より1区に作業員を投入して本格的な掘削作業に着手した。1区の中央部において河川であるSD1、北側にお



第2図 グリッド配置図（縮尺1/2,000）

いて同じく河川であるSD2を検出した。二つの河川からは、弥生土器や須恵器を中心に多くの遺物が出土した。平成19年（2007）中は、1区の調査を主として行った。

翌平成20年（2008）3月3日より調査を再開し、1区と併行して2区の調査に着手する。2区は圃場整備時の削平や攪乱の影響で遺構の遺存状況は芳しくはなかったが、それでも1区から続くSD1・2を検出した。SD1は3本の流路に枝分かれしており、下流にあたる東側にむかって扇状に広がっていく様子が見て取れた。その他の主要な遺構としてSD1・2の近傍において、多数の掘立柱建物を検出した。1・2区の遺構の検出は、3月一杯でほぼ終了した。

平成20年度の4月に至り、3区の調査準備と平行して1・2区で検出した遺構の実測作業と写真撮影を実施した。4月25日に1・2区の航空写真測量を実施し、1・2区の調査を終了した。

5月1日より3区の調査に本格的に着手する。3区の西半部は大きく削平されており、遺構・遺物は検出できなかった。一方の東半部では、町道脇を中心に掘立柱建物や井戸等の遺構を多数検出した。また、西半部を中心に下層の状況を探るためトレンチを設定した。その結果、礫層や砂層が互層となって堆積しており、かつ一部のトレンチでは流木が検出された。僅かではあるがトレンチの上層からは縄文土器と推定される摩滅した土器の微細片が出土した。3区西半部は山際に近いこともあって、谷内に土砂が繰り返し流れ込んで礫層や砂層が互層となって堆積していたことが判明した。

1・2区の間にある逆L字状を呈する箇所については、試掘調査では遺構・遺物は確認できなかった。このため、当初はこの箇所を調査対象から外していたが、1・2区の調査の進捗に伴い、この箇所にも遺構が広がる可能性が高くなった。削平のため地形が大きく改変を受けていたのと、小規模な試掘坑内での観察が主であったため十分に遺跡の広がりが捉え切れなかったようである。このため、3区の調査と併行する形で、6月に南北にはしる農道の東側法面脇を中心にトレンチを入れ、遺構・遺物の有無について再度確認作業を行った。6月6日より作業を開始し、1・2区で検出したSD1・2が削平を受けながらも遺存していることが判明した。これにより、1・2区の間逆L字状を呈する箇所も調査の必要が生じた。この部分を6区とし、年度後半に調査することとなった。

3区の調査に目途がたってきた、6月11日より4区の調査に着手した。4区では、調査区の北半部を中心に遺構を多数検出した。1区から2区を経て東へ流れていくSD1は、4区においても検出し得たが削平のため底部の一部を検出したに過ぎない。その他に、複数の掘立柱建物を検出した。8月27日に3・4区の航空写真測量を実施し、3・4区の調査を終了した。同日より、町道を挟んだ西側の5区の調査に着手した。

5区の北端では、2区から繋がるSD2が南東方向に向きを変え、県道改良工事に伴う調査区（以下、県道調査区と略す）に接して検出し得た。更に5区の中央部では、2区と4区を繋ぐようにSD1を検出した。また、削平のため全ての柱穴を検出し得ないものも存在したが、多数の掘立柱建物を検出した。

5区の調査と併行して、10月16日より6区の調査に着手した。6区は谷中央部に設けられた東西にはしる農道に接し、更に1・2区の間南北にはしる農道下に設けられた逆L字状の調査区である。調査区北端の東西にはしる農道脇では1区から連なるSD2が良好に遺存していた。これにより、1区から東側の県道調査区までの間で検出した河川が、一つに繋がった。更に、竪穴式住居もしくは平地式住居と考えられる遺構も検出した。この遺構は複数の細い溝が弧状にめぐり、その内側には複数の柱穴が存在した。大きく削平された箇所での検出であったため、遺存状況が悪く住居の規模を正確に求めることはできなかった。柱穴および溝内からは、僅かではあるが弥生土器が出土しており、弥生時代の住居と

考えられる。

11月19日から、1区の西隣に設けられている農作業用の昇降路下の調査を開始する。この昇降路下にSD2がのびていくため、急遽検出作業を実施した。この箇所を1区追加調査区として扱った。

11月26日に5・6区の航空写真測量を実施し、5・6区の調査を終了した。

11月28日には昇降路下の1区追加調査区の調査も終了し、平成19年度からの発掘調査を終了した。

平成21年度に至り町道の振替作業が終了し、町道下にあたる7区の調査を7月1日より着手した。当初は調査員のみで事前の準備作業を行い、27日より作業員を投入して本格的な掘削作業に着手した。7区は、平成20年度に調査を実施した3区と4区の間にあたる。3・4区の調査成果を考慮すると、7区の南半部は遺跡の縁辺にあたるものと推定される。圃場整備や町道建設時の削平や攪乱が至る所におよんでおり、当初想定していた以上に遺跡の遺存状況は芳しくなかった。調査区の中央において自然流路であるSD92を検出し、更に結桶を埋設した土坑を2基検出した。8月25日に7区の航空写真測量を実施した。8月31日に全ての作業を終え、曾根田遺跡の調査を終了した。

以下に、簡単ではあるが調査の進捗状況を、調査日誌より抄録する。

平成19年（2007）

11月1日：重機による表土剥ぎに着手。

11月14日：1区に作業員を投入して調査区内に排水溝をめぐらす。

11月26日：1区の遺構精査を開始。

12月6日：河川であるSD1・SD2にトレンチを設定し、本格的な検出作業を開始。

平成20年（2008）

3月3日：1区と併行して2区の調査に着手。

3月4日：2区の調査区北側と東側に排水溝をめぐらす。

3月12日：2区において、1区から続くSD1の検出を開始。

3月11日：1区にてSD5の検出を開始。

3月13～31日：1・2区において掘立柱建物を検出し、随時実測作業を実施。

4月15日：1区にて検出遺構の写真撮影を開始。

4月21日：2区にて検出遺構の写真撮影を開始。

4月23日：1区の全景写真を撮影。

4月25日：1・2区の航空写真測量実施。午後、2区の全景写真を撮影。

5月1日：3区の調査に着手。

5月12日：SE1の検出開始。

5月27日：SE2の検出開始。

6月4日：3区の全景写真撮影。

6月9日：6区のトレンチ調査に着手。

6月10日：6区のトレンチ調査により、東西にはしる農道脇にて1区からのびるSD2を確認する。これにより、6区にも遺構が広がる可能性が高くなる。

6月11日：4区の調査に着手。

6月18日：6区トレンチ調査区の写真撮影。

- 7月9日：4区にて弥生時代のSK33を検出し、図面作成。
8月12日：4区にて掘立柱建物の写真撮影を開始。
8月27日：3・4区の航空写真測量実施。5区の調査に着手。
9月5日：4区の全景写真撮影。
9月9日：5区にてSD2の検出開始。トレンチを設定し、土層の堆積状況を把握する。堆積土の最下層より縄文土器出土。
9月17日：5区にて掘立柱建物の写真撮影を開始。
9月22日：5区のSD2より刻み梯子が出土。
10月1日：5区のSD2より扉板が出土。
10月16日：6区の調査に着手。
10月17日：6区のSD2の検出作業に着手。
11月10日：6区のSH1・2の検出。
11月19日：1区西側の昇降路下の追加調査区の調査に着手。SD2の検出作業に着手。
11月26日：5・6区の航空写真測量実施。午後、全景写真撮影。
11月28日：1区追加調査区の調査を終了し、平成20年度の調査を終了する。

平成21年（2009）

- 7月27日：作業員を投入して、7区の調査に本格的に着手。
8月6日：SD92にトレンチを設定し、本格的な検出作業を開始する。
8月7日：SK61の検出開始。
8月11日：SK62の検出開始。
8月25日：7区の航空写真測量を実施。
8月31日：器材類の撤収を行い、平成21年度の調査を終了する。

第3節 遺物整理

曾根田遺跡の遺物整理は、平成21年度より着手した。年度毎に実施した遺物整理の主な作業は、以下の通りである。

- 平成21年度 洗浄、注記、接合、分類、復元、実測、遺物の写真撮影
平成22年度 洗浄、注記、接合、分類、復元、実測、遺物の写真撮影、木製品保存処理
平成23年度 復元、実測、トレース、遺物の写真撮影、木製品保存処理
平成24年度 実測、トレース、遺物の写真撮影、調査区全体図作成
平成25年度 トレース、遺物の写真撮影、原稿執筆

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

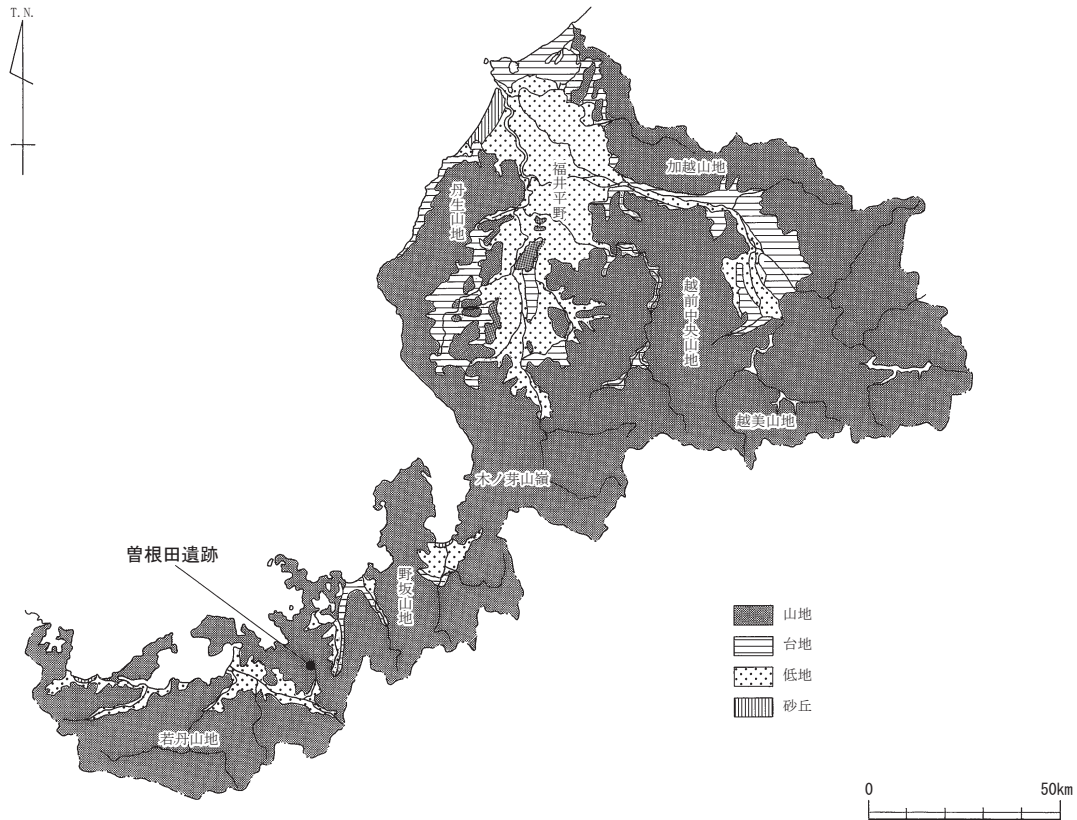
福井県は本州中央部の凹部に位置し、西側は日本海に面する。その規模は東西約130km、南北約100kmをはかり、面積は約4,189km²をはかる（第3図）。

福井県南西部の嶺南地方は、若狭湾（日本海）に面してほぼ東西に横たわり、背後は丹波高原北縁の若丹山地の山稜を境に京都府および滋賀県と接する。この若狭湾一帯は、著しく沈降した地域であり、山地は海岸部にまで迫り、湾岸は典型的なりアス式海岸となっている。

曾根田遺跡が所在する三方上中郡若狭町は嶺南地方のほぼ中央部に位置し、平成17年（2005）3月に三方郡三方町と遠敷郡上中町が郡域を越えて合併して誕生した町である。現在の町域は、東では三方郡美浜町と、西では小浜市と、南東では若丹山地を境として滋賀県高島市と境を接する。

曾根田遺跡は、若狭町西半部にあたる旧上中町域に所在する。旧上中町域の地形は、北部と南部は山地であり、この山地に挟まれて平野が展開する。この平野は、東南の若丹山地から西北の小浜湾にかけて流れる北川と、北部の山地より南流して旧上中町域中央部で北川と合流する鳥羽川とによって形成された沖積平野である。小浜市東部へと続く北川流域の平野は、敦賀を除いた若狭地域では最大のものであり、古代より若狭地域と近畿地方中央部とを結ぶ交通の要衝として栄えた箇所でもある。

曾根田遺跡は、南流する鳥羽川によって形成された狭隘な谷の西側に位置する。鳥羽川は、日本海に



第3図 福井県の地形区分図（縮尺 1/2,000,000）

流入する北川の支流にあたる。そして、この地域は鳥羽川の開析作用によって南北にのびる谷地形をなし、その流域に沖積平野を形成する。鳥羽川流域の谷を地元では鳥羽谷（とばだん）と呼称しており、その長さは全長約5kmをはかる。鳥羽谷の南側の開口部にあたる、下吉田・堤・井ノ口の3地区の接点において鳥羽川は北川と合流し、北川は小浜湾に向かって西流する。北側の谷奥では、海士坂背後の丘陵を越えると日本海に面した小浜市田鳥へと通じる。また、日本海に突き出た黒崎・獅子ヶ崎から倉見峠にかけての鳥羽川沿いの南北に連なる山稜によって、旧三方町域の鱒川水系と画されている。合併前までは、このラインが両町の境界であった。

曾根田遺跡は、鳥羽川上流右岸の上黒田に所在する。上黒田は南北および西側を丘陵で囲われており、丘陵間は鳥羽川の支流である黒田川によって開析された狭い谷地形を呈する。上黒田の現集落は谷の北側丘陵の麓に形成され、谷の南側には標高389.5mの霧ヶ峰がそびえる。遺跡は、上黒田の谷開口部に形成された小規模な扇状地に立地する。

第2節 歴史的環境

前述したように、曾根田遺跡は鳥羽川の右岸に所在する。北川および鳥羽川流域（第4図の左側）は、若狭地域の中心として栄えた箇所である。この地域には、福井県の考古学史における重要な遺跡が多数所在しており、また長期に渡って営まれた遺跡も存在する。考古学的な知見からの歴史的環境については、各種文献にて詳述されているため、詳細についてはそれらの文献に譲りたい。

本節では鳥羽川流域を中心に、発掘調査等によって内容が把握できる主要な遺跡を時代ごとに取り上げて、歴史的な環境について概説したい。

1 縄文時代

縄文時代の遺跡の調査事例は少なく、曾根田遺跡（第4図1）があげられるのみである。曾根田遺跡では、平成19～21年（2007～2009）に発掘調査を実施した県道調査区の中央部にて旧黒田川と推定される幅6.5～10mをはかる河川を検出し、河川埋土の下層および最下層より晩期の突帯文土器・条痕文土器が出土した。住居等の明確な遺構は検出できなかったが、該期の集落が近傍に存在した可能性が高い。

2 弥生時代

弥生時代の代表的な遺跡として、三生野油田遺跡・大鳥羽遺跡・曾根田遺跡・向山遺跡があげられる。

三生野油田遺跡（第4図12）では、昭和37年（1962）に実施された土地改良工事の際に、田舟・刻み梯子が出土した。しかし、土器が伴わなかったため、田舟・刻み梯子の帰属時期は明らかにすることができなかった。昭和61年（1986）に圃場整備事業に伴って、遺跡の一部についてトレンチによる発掘調査が実施された。遺構は検出されなかったが、弥生時代後期から平安時代の土器が出土した。前述の田舟・刻み梯子が出土した地点の近傍より、弥生時代後期の土器がまとまって出土したことから、田舟・刻み梯子は弥生時代後期に属する可能性が高まった。

大鳥羽遺跡（第4図29）は、昭和48年（1973）に有樋式磨製石剣や土器が出土し、遺跡の存在が明らかとなった。更に、昭和58・59年（1983・1984）に圃場整備に伴いトレンチによる発掘調査が実施され、溝・土坑等が検出された。遺物では、弥生時代中期の畿内系と近江系の土器がまとまって出土した。

曾根田遺跡（第4図1）では、前述のように県道調査区の中央にて河川を検出した。この河川の埋土中より弥生時代後期の土器が多量に出土した。また、該期に属すると推定される木製品も多数出土している。遺構に関しては、帰属時期が明確ではないものの、検出された複数の掘立柱建物の一部は弥生時

代に属する可能性がある。

弥生時代の墳墓・祭祀関係の遺跡として、向山遺跡（第4図92）があげられる。向山遺跡は鳥羽川と北川の合流点近傍の丘陵上に立地する。丘陵の西側山腹では、明治33年（1900）に北川堤防修築用の土砂採取工事の際に扁平鈕式袈裟襷文銅鐸が出土した。一方丘陵上においては、昭和63～平成2年（1988～1990）に工業団地造成に伴い発掘調査が実施され、弥生時代後期を主体とする土坑墓12基と土器棺墓1基を検出した。土坑墓は平面形が長方形を呈し、一部の土坑墓からは鉄剣等が出土している。土器棺墓は口縁部を欠いた壺と高杯を合わせ口にして埋置したものであったが、根株が覆っていたため掘方等の痕跡が確認できなかった。

3 古墳時代

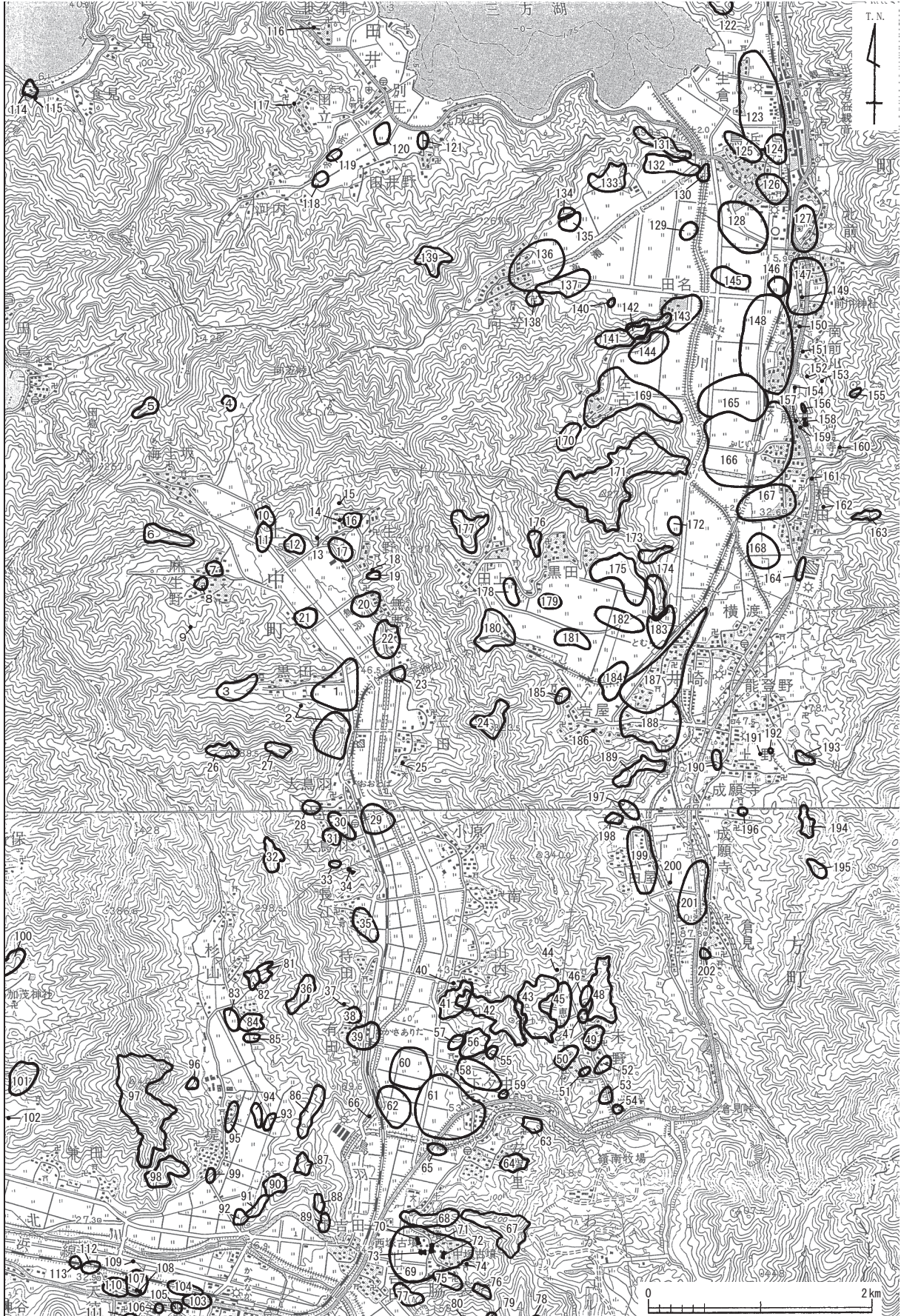
古墳時代に至ると、北川・鳥羽川流域には、前方後円墳を中心に多数の古墳が連綿と築かれた。古墳時代中期（5世紀代）には、北川・鳥羽川の合流点東側に位置する脇袋を中心に前方後円墳が築かれ、後期（6世紀代）に至ると天徳寺・日笠の2地区を中心に前方後円墳が築かれる。北川・鳥羽川流域の古墳群は東から西に向かって継続的に築かれ、埴輪や葺石を伴う等の特徴から近畿地方とのつながりをうかがわせる。これらの古墳群は若狭地域の首長墳と考えられ、北川・鳥羽川流域が当時の中心地であったことが明らかである。

北川と鳥羽川の合流点右岸の尾根上には、前方後円墳1基、円墳7基、方墳1基から成る向山古墳群（第4図91）が所在する。このうち前方後円墳である1号墳は全長48.6mをはかり、埋葬施設として後円部に北部九州系の横穴式石室が構築されていた。この石室は、若狭地域の横穴式石室の初現にあたるものであった。石室内から鎧や刀等の鉄製武器・武具をはじめ、金銅製耳飾り等の装飾品が多数出土している。副葬品等から、1号墳は5世紀中頃に位置づけられる。

北川と鳥羽川の合流地点左岸には、大型の前方後円墳が多数築かれている。特に膳部山の麓には西塚古墳（第4図70）、上ノ塚古墳（第4図71）、中塚古墳（第4図72）、糠塚古墳（第4図73）の4基の前方後円墳を中心とした脇袋古墳群がある。西塚古墳（第4図70）は全長74mをはかり、大正5年（1916）の調査で多くの副葬品が出土した。石室は赤彩された竪穴式石室と報告されていたが、石室構造の再検討からかまちいし 榿石と立柱石を備え、板石で閉塞する北部九州系の横穴式石室であることが明らかとなった。時期は、出土遺物から5世紀中頃に位置づけられる。上ノ塚古墳（第4図71）は全長100mをはかり、平成4年（1992）の範囲確認調査で周濠内に木柱を持つことが明らかとなった。時期は、出土遺物から4世紀末から5世紀前半に位置づけられる。中塚古墳（第4図72）は宅地開発等により墳丘が削平されており、墳丘規模・帰属時期が不明確であった。平成4年（1992）の範囲確認調査により全長が約72mをはかることが判明した。時期は出土遺物から5世紀末に位置づけられ、西塚古墳に後続する。糠塚古墳（第4図73）は遺存している墳丘の形状から円墳と考えられていたが、平成21年（2009）の範囲確認調査により全長50～60mをはかる前方後円墳であったことが判明した。時期は、出土遺物から5世紀末と推定されている。

以上の主要な前方後円墳が所在する平野部の南側低丘陵上にも、多数の古墳（第4図77）が築かれている。全容については明らかではないが、その内の1基である脇袋丸山塚古墳について、平成24年（2012）に範囲確認調査が実施され、全長51mをはかる帆立貝式古墳であることが判明した。時期は、出土遺物から5世紀後半に位置づけられる。

鳥羽谷の上流域から中流域にかけては、古墳時代中期の城山古墳および後期の大谷古墳・下山古墳群



第4図 周辺の遺跡分布図 (縮図 1/50,000)

第2節 歴史的環境

第1表 遺跡名一覧表（番号は第4図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	曾根田遺跡	散布地	弥生・古墳・平安	69	脇袋遺跡	散布地	古墳	137	角谷遺跡	集落跡	弥生・奈良
2	下山古墳群	古墳	古墳・中世	70	西塚古墳	国史	古墳	138	風神遺跡	散布地	弥生
3	黒田寺跡	寺院跡	中世	71	上ノ塚古墳	国史	古墳	139	天原日城跡	城跡	
4	田井城跡	城跡	中世	72	中塚古墳	国史	古墳	140	仏浦遺跡	散布地	縄文・弥生
5	独活坊跡	寺院跡		73	糠塚古墳	古墳	古墳	141	田名古墳群	古墳	古墳
6	麻生野塚跡	城跡	安土桃山	74	勝手神社古墳	古墳	古墳	142	田名城跡	城跡	室町
7	香川屋敷跡	館跡	安土桃山	75	脇袋古墳群（丸山支群）	古墳	古墳	143	田名村山遺跡	散布地	弥生・平安
8	光照寺谷遺跡	散布地	平安・中世	76	瓜生上磐跡	城跡	安土桃山	144	田名古路谷前遺跡	散布地	弥生
9	経ヶ鼻経塚	経塚		77	上下の森古墳群	古墳	古墳	145	江崎遺跡	散布地	縄文・平安
10	海士坂古墳群	古墳	古墳	78	瓜生古墳群	古墳	古墳	146	清水本遺跡	散布地	弥生・古墳
11	古和田遺跡	散布地	古墳・奈良	79	瓜生下磐跡	城跡	安土桃山	147	北前川遺跡	散布地	古墳・中世
12	三生野油田遺跡	集落跡	弥生・古墳	80	岩内古墳	古墳	古墳	148	南前川豆田遺跡	散布地	弥生・中世
13	西山古墳	古墳	古墳	81	杉山竊跡	竊跡	奈良・平安	149	牛塚古墳	古墳	古墳
14	頭古墳	古墳	古墳	82	小野寺跡	寺院跡		150	勘四郎古墳	古墳	古墳
15	八幡裏古墳	古墳	古墳	83	畦田遺跡	散布地	奈良	151	岡の山古墳群	古墳	古墳
16	頭遺跡	散布地	古墳・中世	84	有田坂遺跡	散布地	奈良・平安	152	下り山古墳	古墳	古墳
17	茶の森古墳群	古墳	古墳	85	神子谷遺跡	散布地	奈良・平安	153	大納言古墳	古墳	古墳
18	光里古墳	古墳	古墳	86	坂尻古墳群	古墳	弥生・古墳	154	道の上古墳	古墳	古墳
19	堂山城跡	城跡	安土桃山	87	吉田堡跡	城跡	安土桃山	155	南前川城跡	城跡	中世
20	七反田遺跡	散布地	縄文・平安	88	下吉田堡跡	城跡	安土桃山	156	六号神社古墳群	古墳	古墳
21	甲ノ浦遺跡	散布地	中世	89	吉田の寺跡	寺院跡		157	藤井岡三味古墳	古墳	古墳
22	池田遺跡	散布地	弥生・古墳	90	向山磐跡	城跡	安土	158	松尾谷古墳	古墳	古墳
23	山の鼻古墳群	古墳	古墳	91	向山古墳群	古墳	古墳	159	藤井岡古墳	古墳	古墳
24	鈴ヶ嶽城跡	城跡	室町	92	向山遺跡	祭祀	弥生・古墳・中世	160	ツガノ古墳	古墳	古墳
25	岩神経塚	経塚		93	坂ノ尻遺跡	散布地	奈良・平安	161	権兵衛古墳	古墳	古墳
26	霧ヶ峰城跡	城跡	安土桃山	94	五反田遺跡	散布地	奈良・平安	162	高野谷古墳	古墳	古墳
27	霧ヶ峰城出城跡	城跡	安土桃山	95	中森下遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	163	相田城跡	城跡	中世
28	大栗遺跡	散布地	奈良・平安	96	内藤氏館跡	館跡	安土桃山	164	きよしの古墳群	古墳	古墳
29	大鳥羽遺跡	集落跡	弥生	97	箱ヶ岳城跡	城跡	安土桃山	165	南前川遺跡	散布地	弥生・古墳
30	由留木地蔵遺跡	散布地	古墳	98	堤古墳群	古墳	古墳	166	藤井遺跡	集落跡	縄文・中世
31	稲荷跡遺跡	散布地	奈良・平安	99	下茶屋遺跡	散布地	奈良・平安	167	カプロヨノキ遺跡	散布地	古墳
32	長江堡跡	城跡	安土桃山	100	加茂古墳群	古墳	古墳	168	的場遺跡	散布地	古墳・中世
33	長江古墳群	古墳	古墳	101	芝原古墳群	古墳	古墳	169	佐古遺跡	散布地	弥生・中世
34	城山古墳	古墳	古墳	102	堂之前古墳	古墳	古墳	170	佐古古墳群	古墳	古墳
35	皆臨遺跡	散布地	古墳・中世	103	井ノ口古墳群	古墳	古墳	171	大倉見城跡	城跡	室町
36	持田城跡	城跡	安土桃山	104	堂角古墳群	古墳	古墳	172	西の坪遺跡	散布地	弥生・古墳
37	有田古墳	古墳	古墳	105	野山の寺跡	寺院跡		173	西の坪古墳群	古墳	古墳
38	新田氏館跡	館跡	中世	106	上高野古墳	古墳	古墳	174	井崎磐跡	城跡	室町
39	有田遺跡	集落跡	古墳・平安	107	森下遺跡	散布地	古墳・平安	175	八反田遺跡 (黒田埋没林群集地)	散布地	縄文・古墳・中世
40	山内丸山古墳	古墳	古墳	108	十善の森古墳	古墳	古墳	176	黒田愛宕山磐跡	城跡	室町
41	大谷古墳群	古墳	古墳	109	丸山塚古墳	古墳	古墳	177	田上城跡	城跡	室町
42	山内城跡	城跡	安土桃山	110	上富遺跡	散布地	古墳・中世	178	田上遺跡	散布地	弥生・平安
43	末野西竊跡群	竊跡	奈良・平安	111	天徳寺古墳群	古墳	古墳	179	下の坪遺跡	散布地	奈良・平安
44	末野古墳	古墳	古墳	112	桂森古墳群	古墳	古墳	180	岩屋遺跡	散布地	平安・中世
45	殿島遺跡	散布地	奈良・平安	113	下田遺跡	散布地	古墳	181	向黒遺跡	散布地	奈良・平安
46	宮ノ前遺跡	散布地	奈良・平安	114	食見遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	182	江端遺跡	散布地	弥生
47	寺山遺跡	散布地	奈良・平安	115	紙屋古墳	古墳	古墳	183	井崎丸山遺跡	散布地	古墳・中世
48	末野東竊跡群	竊跡	奈良・平安	116	若松さん古墳	古墳	古墳	184	年清水遺跡	散布地	奈良・平安
49	末野遺跡	散布地	奈良・中世	117	上山田古墳	古墳	古墳	185	双子山古墳群	古墳	古墳
50	中田遺跡	散布地	奈良・中世	118	八通遺跡	散布地	平安	186	ダイショウゴウサン古墳	古墳	古墳
51	宮ノ下遺跡	散布地	奈良・平安	119	六通北遺跡	散布地	奈良・平安	187	千本木遺跡	散布地	弥生・中世
52	的場遺跡	散布地	古墳	120	二通遺跡	散布地	古墳・平安	188	榎木遺跡	散布地	古墳・中世
53	神田遺跡	散布地	奈良・平安	121	田井野貝塚	貝塚	縄文・平安	189	岩屋城跡	城跡	室町
54	角田遺跡	散布地	奈良・平安	122	堂谷山城跡	城跡	室町・近世	190	畑上遺跡	散布地	古墳・中世
55	福成寺跡	寺院跡		123	大上郷遺跡	散布地	弥生・平安	191	大塚古墳	古墳	古墳
56	下夕中古墳群	古墳	古墳	124	城縄手遺跡	散布地	古墳・中世	192	矢竹古墳群	古墳	古墳
57	見畑町遺跡	散布地	奈良・平安	125	市港遺跡	散布地	縄文・古墳・中世	193	能登野城跡	城跡	中世
58	寺縄手遺跡	散布地	弥生・奈良・平安・中世	126	郡神遺跡	散布地	弥生・中世	194	成願寺磐跡	城跡	中世
59	高賢屋敷跡	館跡	鎌倉	127	雉子原遺跡	散布地	古墳	195	白屋北山城跡	城跡	中世
60	藪田遺跡	散布地	奈良・平安	128	呉田遺跡	散布地	弥生・中世	196	關見神社古墳群	古墳	古墳
61	米長堂遺跡	散布地	弥生・中世	129	石田遺跡	散布地	弥生・古墳	197	白屋北山古墳群	古墳	古墳
62	角田遺跡	散布地	古墳・中世	130	鳥浜貝塚	貝塚	縄文	198	勝光庵寺跡	寺院跡	
63	安賀里城跡	城跡	安土桃山	131	鳥浜城跡	城跡	室町	199	白屋遺跡	散布地	平安・近世
64	安賀里古墳群	古墳	古墳	132	ユリ遺跡	集落	縄文	200	孤塚古墳	古墳	古墳
65	安賀里坂田遺跡	散布地	奈良・平安	133	牛屋遺跡	散布地	縄文・弥生	201	倉見遺跡	散布地	縄文・中世
66	八丁塚経塚	経塚	近世	134	北寺遺跡	散布地	縄文	202	倉谷遺跡	墓場	中世・近世
67	膳部山城跡	城跡	安土桃山	135	堂ノ前遺跡	散布地	弥生・古墳				
68	脇袋北古墳群	古墳	古墳	136	向笠遺跡	散布地	縄文・平安				

が所在する。

城山古墳（第4図34）は、鳥羽川右岸の標高127mの丘陵上に立地しており、全長は63mをはかる。若狭地域の主要な前方後円墳が平野部に築かれているのに対して、城山古墳は丘陵上に単独で築かれている。平成5年（1993）に範囲確認調査が実施され、古墳が二段築成の段築を有し、第2段（上段）には葺石を有することが判明した。また、第1段（下段）の上部平坦面には埴輪列が設けられていた。時期は出土遺物から5世紀前半から中頃に位置づけられ、若狭地域の首長墳の一つと考えられる。

大谷古墳群（第4図41）は、鳥羽川左岸の尾根に所在する。古墳群の中心となる大谷古墳は標高80mの尾根の中腹に立地し、直径27.5m、墳丘高5.5mをはかる大型の円墳である。埋葬施設として右片袖式の横穴式石室を有しており、石室は羨道長5.6m、玄室長5.1m、玄室内の高さが最高所で3.2mをはかる。石室内はすでに盗掘を受けていたが、昭和31年（1956）に石室内の清掃調査が実施され、残されていた遺物が採集されている。採集された遺物には須恵器や馬具・鉄鏃等の鉄製品があり、なかでも双葉剣菱形杏葉は朝鮮半島の影響を受けた遺物として注目に値する。時期は出土遺物から、6世紀中頃に位置づけられる。平地からの比高差が約35mをはかる尾根の中腹に設けられ、更に大型の石室を有することから、消失した小浜市丸山塚古墳に続く首長墳である可能性が高い。なお、大谷古墳背後の尾根上にも古墳が存在すると記録されているが、中世の山内城跡（第4図42）による地形の改変により正確な基数や内容は把握できていない。

下山古墳群（第4図2）は、上黒田の南側丘陵上および山麓部に立地する。古墳群の前面には曾根田遺跡が展開する。平成19年（2007）に、舞鶴若狭自動車建設事業に伴って山麓部の2基の古墳について発掘調査が実施された。古墳はいずれも直径15m前後をはかる円墳であり、横穴式石室を有する。石室がすでに露出しており、天井石が抜かれる等の後世の改変を大きく受けていた。1号墳は左片袖式の石室を有し、土器の出土は僅かではあったが石室内からは、鉄刀・鉄鏃・鉄鎌・鉄斧等の鉄製品が多く出土した。時期は出土遺物から、6世紀後半から末頃に位置づけられる。2号墳は両袖式の石室を有していたが、左側壁にのみ立柱石を有しており、左右の壁体構造に差異が認められた。2号墳も後世の改変で石室が破壊されているうえに副葬品の出土も少なく、石鏃と刀子が出土したのみである。時期は周溝から出土した土器から、6世紀中頃に位置づけられる。

古墳以外では三生野油田遺跡（第4図12）において、朝鮮半島からもたらされた可能性がある古墳時代中期の陶質土器が出土しており、当地域と海外との交流を考えるうえで貴重な資料となっている。

4 古代（奈良・平安時代）

古代の遺跡として、曾根田遺跡（第4図1）があげられる。

県道調査区で検出された河川の両岸において、複数の掘立柱建物が検出された。建物の帰属時期は明確ではないが、一部は平安時代に属する可能性が指摘されている。河川埋土の上層からは、須恵器がまとまって出土している。また、製塩土器も出土しており、特異な様相を見せている。

5 中世（鎌倉・室町時代）

中世の遺跡としては、黒田寺跡・下山古墳群があげられる。

黒田寺跡（第4図3）は、上黒田の谷奥に所在する中世寺院である。黒田寺は創建時期が不明だが天台宗の寺院で、戦国時代に織田信長の兵火により焼亡したと伝えられている。平成19年（2007）に、舞鶴若狭自動車道建設事業に伴って発掘調査が実施された。調査地一帯には「池之坊」・「東林坊」という字名が残り、調査区の南側を流れる黒田川の改修工事に際しては五輪塔等の石造物が多数出土している。

調査の結果、多数の柱穴を検出したものの建物は確認することはできなかった。また、炭化物や焼土を伴う土坑群も検出されており、墓域であった可能性がある。しかし、調査を実施した地区においては、中世寺院の存在を立証する遺構・遺物を検出することができなかった。遺物では、13世紀代を中心とした土師皿・越前焼等が出土している。

下山古墳群（第4図2）では、中世の集石墓が検出されている。1号墳では、墳丘の西側裾部において、多数の礫が散在していた。その礫群の中に組み合わせ式五輪塔の空風輪・水輪が含まれていた。恐らく、1号墳の周囲には五輪塔を伴う集石墓が多数構築されていたものと推定される。そして、後世の改変によって集石墓が破壊され、石材が散乱したものと想像できる。1号墳の西側裾部の礫群を除去すると、その下から拳大の河原石が直径1mをはかる円形に集石されていた。更に、この河原石の集石下には土坑が設けられていた。土坑内からは刀子が出土した。遺構の形状等から判断して、墓坑と考えられる。1号墳の石室内からは、蔵骨器や副葬品として用いられたと思われる越前焼の鉢や土師皿が出土している。2号墳においても、墳丘の裾部において組み合わせ式五輪塔の空風輪が採集された。2号墳の前面には上黒田集落の墓地が存在し、その中には古い時期に構築された方形区画をもつ石組墓が存在していた。このことから、上黒田の南側山麓部は中世以降墓地として利用されていたことが明らかとなった。中世墓の年代は判然としないが、古墳の石室埋土から13世紀代の遺物が出土していることから、鎌倉時代頃より墓地として利用されていたものと推定される。

その他に、鳥羽谷では中世の山城が数箇所確認されている。北から麻生野の麻生野堡跡（第4図6）、無悪の堂山城跡（第4図19）、大鳥羽の霧ヶ嶺城跡（第4図26）、持田の持田城跡（第4図36）、山内の山内城跡（第4図42）があげられる。

上黒田の南側の丘陵上には、霧ヶ嶺城跡（第4図26）が所在する。城跡は上黒田と大鳥羽の境を成す尾根の先端付近に立地する。西から東にのびる尾根上に長さ約55mにわたって4つの小さな曲輪が階段状に構築されている。曲輪の幅は最大でも約8mをはかるのみで、極めて小規模な城跡である。曲輪自体の造成も簡便で、山頂を利用した見張り台として機能した可能性がある。城主は在地豪族の鳥羽氏と伝えられるが、詳細不明である。

山内の南側尾根上には、山内城跡（第4図42）が所在する。山城は東側の末野にもおよぶ広範囲にわたるが、標高207mの山頂に設けられた上城と山内集落背後の下城に分かれる。上城は南北にのびる尾根山頂に小規模な曲輪を階段状に配し、北・南・西を縦堀で区画する。下城は山内集落南側の狭小な尾根山頂を中心に、北・東・西の三方に曲輪を配する。城主は、若狭武田氏配下の粟屋式部丞光若である。

以上、鳥羽川流域の代表的な遺跡を取り上げ、当地域の歴史的環境を概説してきた。鳥羽川が形成した鳥羽谷は南北に長いうえ狭隘な谷部であるが交通の要衝にあり、早くから若狭地域の中心の一翼を担って発展してきた箇所である。このため、福井県の考古学史においても重要な遺跡が多く所在しており、今後の周辺での調査・研究の進展によって、従来まで不明確であった点が明らかになる可能性が高いと言えよう。

第3章 遺跡の概要

第1節 層序

今回の曾根田遺跡の調査区は、調査前までは水田および道路（町道・農道）として利用されていた。調査区内は圃場整備の影響で地山層まで大きく削平されており、このため遺物包含層は存在しなかった。圃場整備時の整地土層直下が地山層であり、この上面が遺構検出面であった。調査区の基本的な土層は、概ね第Ⅰ～Ⅲ層に分けられる。

第Ⅰ層は層厚20～30cmをはかる、にぶい黄褐色粘質土（代表的な色調は10YR5/3）であり、主に水田の耕土層である。第Ⅱ層は、層厚30～90cmをはかる暗褐色粘質土（代表的な色調は7.5Y6/2）や灰オリーブ色砂質土（代表的な色調は7.5Y6/2）等から構成される土層であり、圃場整備に伴う整地土層である。谷内を西から東に向かって下降する階段状の地形に整形するために、各水田の西側では薄く、東側では厚く盛土されていた。整地土層であるため、土層自体は均質なものではなく場所によって様相を異にしており、粘質土や砂質土、更に砂礫土等が混在する。第Ⅲ層は地山層であり、この層の上面にて遺構を検出した。調査範囲が広大であるため、遺構検出面の地山層は一様ではない。地山層は基本的には黄褐色粘質土（代表的な色調は2.5Y5/6）もしくは暗灰黄色粘質土（代表的な色調は2.5Y5/2）等で構成され、一部において同じく地山層である黒褐色粘質土（色調2.5Y5/2）が遺構検出面であった。この黒褐色粘質土は黄褐色粘質土層よりも下位の土層であり、3・7区の一部はこの土層まで後世の削平がおよび、この上面にて遺構を検出している。なお、第Ⅲ層は谷内の堆積土であり、3区で実施した土層の断ち割り調査では多様な色調の粘質土や砂質土が互層となって複雑に堆積しており、下位の土層からは流木が出土した。また、3区では遺構を検出した黄褐色粘質土の直上において、縄文時代後期の土器・石器が狭い範囲から出土している（第41図）。遺構に伴う遺物ではないが、遺跡存続期間の下限を示す資料と考えられ、上黒田の谷部は遅くとも縄文時代後期より人々に利用され、本格的に利用されるのは縄文時代晩期頃からと想定される。

第2節 遺構の分布（図版第1～12）

今回の調査区の面積は、27,190㎡をはかる。発掘調査で検出した主要な遺構は、住居5棟、掘立柱建物64棟、河川2条であり、その他に土坑・柱穴を多数検出した（第5図）。

調査区は上黒田の谷開口部の南半にあたり、西から東に向かって緩やかに下る地形を呈する。1・2・5・6区の北端では、東西にはしる農道に沿うように河川であるSD2を検出した。このSD2は、平成19～21年（2007～2009）に発掘調査を実施した県道調査区で検出した河川1につながるものである。このSD2は、谷中央部を西から東に向かって流れており、またその規模から推定して、かつての黒田川であると考えられる。なお、1・6区ではSD2の南側肩部を検出したに過ぎず、現在も農道下には河川SD2の北側肩部が遺存している。

1区から2・5区を経て4区にいたる形で、細切れながらも河川であるSD1を検出している。このSD1は2区においてSD1a～cの3つに分流することが判明しているが、削平により流路が分断されているため、全体の形状は把握できていない。なお、2区の南側で検出されたSD1cは、2区のSD13、3・7区で検出したSD92につながる可能性がある。SD1はSD2と併行するものの、その規模は小さく、



第5図 遺構配置図 (縮尺 1/1,000)



Y=11950
Y=11940
Y=11930
Y=11920
Y=11910
Y=11900
Y=11890
Y=11880
Y=11870
Y=11860
Y=11850
Y=11840
Y=11830
Y=11820
Y=11810

X=-54450
X=-54460
X=-54470
X=-54480
X=-54490
X=-54500
X=-54510
X=-54520
X=-54530
X=-54540
X=-54550
X=-54560
X=-54570
X=-54580
X=-54590
X=-54600
X=-54610

0 40m

恐らくSD 2から派生した流路と推定される。なお、両河川からの出土遺物には時期的に偏りが認められるため、一時的に機能を失っていた時期が存在した可能性もある。しかしながら、SD 1・2はおおよそ縄文時代から平安時代の長期に渡って機能していたようである。ただし、削平を受けているため、いつまで機能していたかは定かではないが、中世段階までは流れていたと推定される。

主要な遺構である住居および掘立柱建物は、河川に沿うように北西から南東にかけて帯状に展開する。住居は削平のため全形をとどめておらず、弧状にめぐる周溝からその範囲を推定した。住居は河川SD 1・2に挟まれた狭い範囲に展開する。

一定の間隔で方形もしくは長方形に配置されている柱穴列を掘立柱建物とし、可能な限り復元を試みた結果、64棟を復元し得た。しかし、削平の影響により柱穴が消失した可能性が高く、復元し得なかったものも存在すると考えられる。2・5区の境に遺構の空白域（17列）があり、これを境に掘立柱建物が東西二つのグループに分かれるように見えるのは削平の影響によるものと見るべきであろう。しかしながら、その分布状況は少なからずSD 1・2に規制を受けて展開するようである。建物の長軸は、基本的にはSD 2に直交もしくは併行するように設けられており、ほぼSD 2が東西にのびる調査区西半部（SB 7以西）では、建物は長軸を南北もしくは東西に向けている。一方、調査区東半部（SB 7以东）ではSD 2が蛇行しながら流れを南東に変えるため、長軸を北西から北東に向けているものが目立つ。なお、建物の帰属時期を示す遺物の出土が僅少であるため、掘立柱建物の時期を明確に捉えることができなかったが、おおよそではあるが掘立柱建物の時期は弥生時代から平安時代が中心となるものと推定される。ただし、SB55は中世に属する可能性がある。なお、県道調査区では、SD 2と同一の河川である河川1の北側においても掘立柱建物等の遺構を多数検出している。掘立柱建物を中心とした集落が、谷の北半にも展開することが明らかとなっている。一方、SD13からSA 1を経てSB15を結んだラインから以西については、明確な遺構は検出し得なかった。恐らく南側の丘陵の裾部が緩やかにこの付近まで伸びていたものと想像され、削平により平坦な地形に改変されたためと考えられる。

以上、曾根田遺跡は河川に規制された集落遺跡であり、県道調査区の調査成果も踏まえると谷開口部一帯に広く集落が展開していたと言えるだろう。

第3節 遺物の出土状況

曾根田遺跡からは、縄文時代から中・近世にかけての各時期の遺物が出土している。出土量から、主体となるのは弥生時代から平安時代にかけての遺物である。

前述のように、調査区は以前に実施された圃場整備に伴う工事によって大きく削平されており、このため遺物包含層は遺存していなかった。しかも、遺構面までも削平を受けている状況であり、遺構自体の遺存状況は芳しいものではなかった。このため、遺構からの遺物の出土は一部にとどまり、遺物の多くは河川であるSD 1・2からの出土であった。次章にて詳述するが、SD 2では、上層から古代の遺物が、下層から弥生時代の遺物が主に出土している。また、出土する範囲は限られるが、最下層からは縄文時代の遺物が出土している。出土した土器はあまり摩滅していないため、河川内へ廃棄した後もあまり移動はしていないと考えられ、河川周辺より遺棄された遺物群と考えられる。土器以外では、河川内より木製品が多く出土している。木製品の多くは、弥生時代以降の土層からの出土であった。木製品の多くは用途不明の板材であったが、槽や刻み梯子等の器種が特定できるものも僅かに出土している。